

釣れ釣れなるままに

2012年思い出の釣行記 PART. 6

夏枯れ3連荘

鹿島釣狂

夏枯れのままロン

9月1日、月末に開催される岩見沢釣遊会第5回大会の下見を兼ねて、とんとん会の大会に参加した。釣り場範囲は庶野港～音調津港で、本来であれば岬トンネルやでオニトップでタカノハを狙いたいところだが、釣遊会大会は目黒港までとしているため、手前の目黒港周辺で竿を出すことにした。9月の大会は保険としてアカハラを確保する必要があるので、まずは漁港左のサルル川河口で状況を探ってみた。この付近もタカノハ情報があるところなので自作したタカノハ仕掛を遠投しておく。そしてアカハラ用天秤ゴロ仕掛けを近投した。竿を出してもまもなく35cm程のアカハラがバタバタと釣れたのだが、次第に型が小さくなってきたので、長居は無用と4本だけをバックカンに仕舞いこんでサルル覆道に向かって歩き出した。

途中、目黒港では車が盛んに行き交っていた。港の岸壁に立ち寄ってみると、沢山のシャケ狙いの釣り人が下準備をしておき、夜明けのシャケ祭りを期待して息を殺して待っているところだった。漁港内ではどこが狙い目なのだろう。この時期でもソイヤアブラコの釣果があると聞いており竿を出してみたいところだが、この混雑ではトラブルを抱え込みそうな気配である。

目黒覆道、サルル覆道に向かって更に進んでみた。サルル覆道手前にあるトウフ（四角いテトラ）が見えてきた。このトウフの上から沖根を狙うと大物アブラコやカジカが出るという有名場所だが、どのようにしてそのトウフに乗ったらよいか分からない。サルル覆道脇に立岩があるのだが、その岩壁を伝って下りて行くには急勾配でとても無茶な話である。立岩の右横に付いた階段下に下りてはみたがテトラに打ち付けた波飛沫が頭から

降り注いでくる有様だ。この満潮時に立岩の外側を伝ってトウフまで行くにはチト無理な相談だというものだ。

仕方なく階段上から様子を探ってみることにした。遠投にハゴトコが来るのだが根掛かりがひどくてなかなか手強い。近投のゴロネット仕掛によいアタリが出た。引き寄せてみると25cm程のカジカである。その周辺を探ってみたが似たようなカジカばかりで35cmが最大であった。



立岩の横で竿を出す

目黒覆道前に移動した。潮が引いてきており前方の路頭岩が幾つも剥き出しになって打ちにくい状況にある。足元も大岩やゴロタ石で釣り場を設定することも厳しいが、高低差の少ない足場を確保して遠投を試みた。海藻が少ないのか、オモリがゴロゴロとして落ち着かない。ハゴトコが何匹かきたが、大物の気配の無いまま締め切り時間を迎えてしまった。成績のほうはカジカ4とアカハラ1で何とか4位に食い込むことが出来た。



目黒覆道前階段から下りた岩場。目黒漁港ではシャケを狙った釣り人で満杯だった。漁港横の磯には幾つかの溝が掘られていたが・・・。

道場破り？

9月16日、札幌医釣会の大会に参加した。6月の釣遊会大会で札幌医釣会会長である中江政美氏に出会ったのがきっかけだ。たまたま一緒に入った東歌別で釣りのご指南を賜りながらも、7月の釣遊会大会に来賓としてお招きすることになったのだ。その7月の大会で、中江氏は下近浦に入ってカジカやアブラコの大物を仕留めて見事優勝を果たした。そこで今回の医釣会の大会案内をいただいていたのだ。

出発当日は百餅祭りを中核とした岩見沢秋季祭典があった。午前中は町内会の役員をしている関係で子ども神輿の行列に付き添った。終わったあとにビールのお誘いがあったが、ここは札幌に向けて車の運転をせねばならないのでぐっと我慢することとなった。

午後、釣り道具等の準備をして札幌に向けて出発した。早い夕食だったが、環状通りにある麵屋「じょうきげん」で海老ラーメンをとってから、午後6時、集合場所に指定された札幌総合卸センター付近の駐車場に着いた。駐車場前にはすでに釣りバスが停車しており、中江会長他医釣会のメンバーに温かく迎え入れてもらった。

バスは指定席になっており、私の座席の前には中江会長、笹島例会長、横に氏家副会長が座っていた。札幌医釣会とはどんな釣り会なのだろうと前もってホームページを覗いてみた。大会記録が乗せてあり優勝者のコメントなどもあって大変参考になるものだった。前回優勝者が笹島氏で今回の例会長となるわけだが、フンコツでの大物カジカとのやりと

りを聞かせていただいた。氏家氏は以前、釣り大会後のラーメン店で1度だけ言葉を交わしただけなのだが、妙に印象深く、そのときの様子などを「北海道のつり」に載せていただいたことがある。それでなんとなく旧知の仲のように親しくお話させていただいた。

彼は医釣会で年間優勝を何度も果たしている名手だが、昨年は大病を患って不本意な成績に終わっていた。今回の大会も大岩場での展開は控えて様似港でアカハラを狙うという。最近では趣味のマラソンの練習を始めており、札幌市民マラソンにも参加する予定だと元気な笑顔で話してくれた。

それぞれの歳を話しているうちに私が寅で、卯（笹島）、辰（中江）、巳（氏家）と1歳違いだったことが判明して尚更親近感を覚えた。後ろの席には大内氏や南氏（ブログ「ボナさんの釣り三昧」の主宰者）の顔も見える。彼らは札幌交綸会との交流大会で顔見知りなので心強かった。

医釣会の審査は2匹身長+5匹重量で争うことになる。2匹身長は同魚種でもよく、2魚種が必要な釣遊会とは違い気が楽といえばそうなのだが、9月でアブラコを5本とかカジカを5本揃えるのは並大抵ではない。様々な魚種を狙うことが必要でその中にアカハラも対象魚とした作戦を展開しなければならないだろう。そうなる経験のある無難な釣り場を選ばなければならないだろうか。しかし今回は他流試合である。ボンズ覚悟で大物1本に的を絞って挑戦するのも良いだろう。道場破りを名乗って看板を剥がしてしまうのは気が引けるが、振り返りにあって惨めな思いをするのも面白くない。まあ、痛い目を見ないように練習生として参加することにしよう。

仁雁別川

仁雁別川で下りた。ここには初めて入ることになる。10月過ぎのカジカがメインの釣り場なのだが、今年になって66cm上のタカノハが上がったという噂を聞きつけたのだ。磯波が2mと少し高いので仁雁別川と留崎川の間で波の比較的死んでいるところがあったのでそこに釣り場を設定した。これから満潮に向かってくるので波が打ちあがらないような少し小高くなったところで足場も小砂利でしっかりとしているところを選んだのだ。

まずは三脚にぶら下げる丸バケツの水を汲みに磯に下りた。磯波が急な駆け上がりになり打ち寄せてそれが引いた時に足元を掬われそうになり、引き波の強さに驚かされた。なだらかな砂浜だとこんなことは感じたことは無いのだが……。竿1本にアカハラ仕掛けをつけて振り込み、竿2本はタカノハ仕掛けを遠投した。近投のアカハラ仕掛けには磯際に漂うゴミが付いたが、道糸に絡んだゴミに混ざってアカハラがポツン、ポツンと掛かった。遠投にはゴミも付かないのだが全くあたりが出ない。

シャケ釣り師がやってきて、仁雁別川を覗いてあきらめ顔だ。「もう、そろそろかなと期待して来たが、釣り人が誰もいないので釣れていないのですね」と私に話しかけてきた。仁雁別川のシャケ釣りは有名だが、禁止区域に河口の設定がなく気楽にここを選んだのだが、これからシャケ釣り師が来るとなると厄介だ。国道付近の空き地にも車が何台か

駐車し始めた。

今日はほんとうに蒸し暑く、釣り場に着いた時から汗だくで、用意した2本のペットボトルのお茶1本分を飲んでしまった。あと1本も口をつけてしまっている。まだ時間はたっぷりあり、このままだと途中で水を飲み干してしまって熱中症ということになっては大変だ。今年の猛暑で何人もの方が熱中症で亡くなった。仁雁別川の流れが綺麗だったので、空になったペットボトルに水を汲んでみた。エキノコックスが心配でペットボトルをヘッドライトの光にかざして見ても全くもって透き通っていた。透き通っているから安心だとはいえないのだが、濁っているよりはましである。

私は釣り場に小銭を持っていかない。付近にお店や自動販売機があると、ビールやワンカップなどに気が向いてしまって釣りに集中できなくなるからだ。昔はチョッキに紙幣を入れていた時期もあったが、今は帰りのバスに乗り込んでからのクーラーに詰め込んだ冷え冷えの缶ビールを楽しみにしている。しかし、年老いた今、こんなことがあると、やはり小銭を持って歩かなければならないだろうか。

夏枯れ2連荘

移動することにした。アカハラ4本だけだが4時間も頑張ったのだからもうよしとしよう。近浦方向に向かって歩き出し、波が死んでいる溝を探しながら2カ所を攻めてみた。しかし、それぞれ1時間程やっても全くアタリが出なかった。

今度は近浦舟揚場の左湾道で竿を出すことにした。ここもタカノハの情報のあるところで、期待して竿先を見つめたが、チョコマカとしたアタリでギンポが2匹釣れただけだった。薄日が差してきたので防潮堤に上がって磯根の様子を見てみるとご老人がやってきた。「釣れたんか」「全然釣れません」「そうだろうな、ここはカジカが釣れるところなんだが、今年の海は沸いているように熱い。シャケ網を仕掛けてもクラゲやマンボウばかりが網にかかってひどい有様だ。シャケなんか寄り付けることなぞできねえべ。」「マンボウって食用にならないんですか?」「マンボウなんて皮が分厚い上に固くて油っぽい。工夫して食べている奴もいるけど、ワスはなんだか臭い気がして食べる気がしねえな。」「仁雁別川でシャケ釣り師がいたんですが」「そうだんべ、でも釣れねえべな。時期には沢山の人がかかるが、昆布干し場にウンコしていくやつもいる。そんで便所を作れと役場に申し出ているんだが・・・」「昆布漁はどうですか」「昆布取りは8月で終わった。ここら近辺は海が浅いので昆布はすぐとってしまって漁期が短いんだ。エリモの方は海が深いので今でもロープを付けたかぎ爪を使って漁をしている。ワスたちは今、細々と拾い昆布をしてつないでいるんだ。舟も出ているが、それも拾い昆布だ」「舟を出して昆布を抜いても分からないのではないですか」「見ていればすぐ分かるし、そもそもそんなことする馬鹿な奴はいねえ。拾い昆布も抜いた昆布も俺としては同じようなもんだが値段が全然違うんで、不埒な奴が出てきそうなもんだが、そんなことをしたら自分で自分の首を絞めるだけだ。うちの畑はうちらで大事にしなければあかんのだ。」

そんなことをとり止めもなく話しながらも竿先だけは目を離さないようにしていたが、ピクリとも動かない。そのうちに御用籠を背負ったご婦人たちも集まりだし、竿を出している同じ湾洞で昆布拾いが始まってしまった。近浦の舟揚場からも3艘の舟が出て、付近に漂い昆布を拾っている。「邪魔になるのではないですか」と聞いてみたが「なんもかまわねえ。好きなだけ釣っていれ」といわれた。それでも竿を出している周辺に昆布が落ちているので、竿を片付けて移動し始めるとそこで昆布を集めだした。やはり遠慮していたのだ。

締め切りまであと2時間。ダクダクと吹き出していた汗が全く出なくなった。頭がぼうーとしてきているような気がする。用意した2本のペットボトルのお茶はすでに飲み干してしまっていた。仁雁別川で汲んだ水を今度は太陽の日差しに透かしてみる。全くもって透き通っていることを確認して口をつけた。一度口をつけてみるともう止まらない。一気にごくごく飲み干してしまった。

少し元気が出てきた。潮が引いてきているので何度か乗ったことのある中近浦の出岬へ移動した。ここに乘れたときは、何度もアブラコやカジカの大型を抜いている。あと1時間。しかし、残念ながらアタリは全く出なかった。結局5カ所を釣り歩いたが、アカハラ4本の釣果に終わってしまった。

バスを待っている間、日差しが出てきて遮るものがなく、階段上の防潮堤にリュックを置いて小さな日陰をつくり、そこに座り込んで日差しを防いだ。それでも暑くてウエーダーや磯ブーツを脱いで靴下だけになり、ジャージの裾はめくり上げた。

様似の車屋ラーメンで審査した。出てきた魚のほとんどがアカハラで、油駒でカジカ1本、第4下り口でアブラコ2本出たのみだった。優勝者は氏家氏で、様似港に若い会員を案内して大型のアカハラを仕留めてきた。港内の舟と舟の間にチョイ投げして1位、2位を獲得したのだ。今度の9月の大会で釣りもののない時に利用しようと思う。

あれだけ暑かった日高だったが、輪厚のパーキングエリアでバスから下りてみると何だか涼しかった。冷房の効いているバスからなので、不思議な感覚だった。帰ってから新聞を見ると、新冠で30度を超し、9月に入って2度目の5日間連続の真夏日を記録したとある。気象庁発表の過去の天気を見てみると、浦河で9月に入ってから25度を下回ったのは6日と9日の2日間だけだったというからすさまじい。どおりで魚がいなかったわけだと変な納得方をしてしまった。私自身が枯れしてしまわなかったのが救いだが、この夏枯れはまだまだ続きそうな気配である。



5箇所目の釣り場

夏枯れは続く

9月22日（土）初孫が生まれた。我が娘が産み月を迎えて里帰りしていたのだが、真夜中、早期破水したため10月3日の出産予定日を待たずして生まれてきてしまったのだ。たまたま、婿が我が家に来ている時だったので、彼に病院へ運んでもらった。酔っ払いのジジイが出しゃばる訳にも行くまい。朝方、女房から「生まれた」と連絡が入って、病院に行ってみると赤子がフンギャー、フンギャーとか細い声で泣いている。帝王切開は免れたようで、婿から手渡してもらった初孫を恐る恐る抱っこしてみた。尊い命の誕生である。

私は釣りを趣味としているが、その度ごとにその尊い生き物を殺戮しているのだ。獲物は全て持ち帰って成仏させてはいるのだが、むやみな殺生は控えたいと思う。出来ることなら審査提出魚以外はリリースしたいものである。しかし審査規定の5匹が揃うまではと小さなハゴトコでもバツカンに入れてしまっている。フラシに入れて生かしたままならリリースも出来るのだが、そんな釣り場状況にはないのが現実だ。一番厄介なのは審査提出後のアカハラで、料理法を何度か挑戦してみたのだがうまい方法が見当たらず、結局は畑の肥料にしているのが現状である。身近に命の受け渡しに接してみてもあらためてそんなことを考えさせられた。

台風17号、18号が日本列島を襲った。遅れて発生したはずの18号が17号を追い抜いて道東沖で温帯低気圧に変化した頃、17号が大型化して襲ってきたのだ。第5回大会の釣り場範囲である目黒方面は29日4m、30日3mにうねりが残ると予報していた。

浦河方面の予報は波が2.5mとまだマシのようで、急遽、大会範囲を時化に強い井寒台から大型港のある浦河港を經由して様似港までとした。9月末なので、例年だともうそろそろカジカの岸寄りの便りが聞こえてくる時期だが、今年の9月まで続いた猛暑のため、海水温が22度もあり、とても釣りをさせてもらえる状況にはなかった。

私は、当初この大会の入釣場所をサルル覆道付近に絞って下見もしていたのだが、急遽様似港とした。狙いはアカハラ4+他魚種1と考えたが、仲間もアカハラ狙いに変えたようでゴロの量を増やして大会に臨んでいるらしい。カレイやカンカイもあるぞとイソメを出発時に購入した。

港内のアカハラは明るくなってしまうと難しいが、嫁にはもっと苦勞するだろうと考え、まずは様似港の外に付いた舟揚場で竿を出すことにした。この時期にタカノハを釣ったことがあり、今年の7月の大会では50cmを超えるものも出たのだ。

谷口氏、堀内氏も同じ狙いだったようで3人で舟揚場に入る。真ん中に谷口、右に仲俣、少し遅れた堀内氏が左に入った。すぐに谷口氏が何かを上げたようで、近付いてみると30cm強のソイがバツカンに収まっていた。この時期これなら立派な嫁になるだろう。サンマで来たというが、私はサンマを持ってきていない。続いて堀内氏も何か上げたようだ。やはりソイで谷口氏より小型だったが早々に嫁を確保したわけだ。私には何も来ない。釣り始めて2時間ほどその状態が続いたが、ようやくチョコチョコとしたアタリが出た。しかし、ハりに掛からない。そんなことが続いて何が悪戯しているのだろうと竿を手に持ちチョコチョコときたところで合わせると何とか掛かった。25cmほどのウグイであった。ようやく1匹目である。アカハラがいつかは来るだろうと丁寧にアカハラ仕掛けを打ち込む。そいつに立派なガヤが来た。2魚種目である。3時頃ソイ35cmが上がり3魚種目となった。

カンカイ仕掛けに取り替えてイソメをつけて遠投してみる。しかし、アタリは出なかった。夜が白々と明けてきた頃、アカハラ40cmが釣れた。このままアカハラが釣れ続いたらともう一度アカハラ仕掛けに変えて張り切ったが、それは叶わなかった。カジカもアブラコも見込めないのので今度はタカノハに的を絞って、遠投する。しかし、竿先は微動だにしない。谷口氏、堀内氏も同じようだ。

漁師が台風が来る前にと舟揚場の横桁を入れにやって来た。そして今度は、シャケの様子を見に地元の釣り人がやって来た。沖合の20m程の間に網を入れないようにしてシャケの通り道を確保しているので、そこを搔い潜ったシャケが私達の釣っているところを經由して様似川河口に向かっているらしい。9月の今はシャケ待ちをしているが、8月は、様似港の白灯台と赤灯台の間でタカノハを大釣りしたという。タカノハは夫婦でいることが多く、大きなタカノハがダブルで掛かった時は、とうとう釣り上げることができなかったともいう。しかし、外防波堤に上がるのは釣遊会では禁止になっているので向かうことは出来ない。

4時頃アカハラが来たのみでそれから一度のアタリもない。堀内氏も谷口氏も同じだが

兩名とも休まないで打ち続けていた。時間はまだ1時間ほど残しているが、その彼らが片付け始めたので私も片付けることにした。午前9時、私たちが降りた消防署の前でバスを待っていたが、私たちが1番最初に乗り込むことになるので運転手に連絡して迎えに来てもらうことにした。バスはすぐに来たが、そこにはすでに吉井、島、吉田氏が乗り込んでいた。彼らも締め切り時間を待たずして竿を上げていたのだ。様似の釣り公園付近で下りた西川、岡氏も同様だった。西川氏は2時には店仕舞いをして一人で宴会を繰り広げていたというから、ひどく待ちくたびれた様子に見えた。浦河組、井寒台組も以下同文だった。

朝方から降り続いた雨が止まず、井寒台の駐車帯で雨に当たりながらの審査だったが、皆獲物が少なくてあっという間の審査だった。昼食会場は浦河の「まさごラーメン」で予約していたので、井寒台から若干戻ったが、680円均一のラーメンは絶品だった。ラーメン屋の棟続きで風呂屋も経営していたので、今度予約するときは風呂込みで千円でどうだと折衝することとなった。

審査結果

優勝	嵐 光博	9 2 2 点 (アカハラ375mm+ガヤ 272mm+2750g)	浦河港
準優勝	鹿島釣狂	9 1 1 点 (アカハラ401mm+ソイ 330mm+1800g)	様似港
3 位	前野達志	7 9 9 点 (アカハラ356mm+ガヤ 220mm+2230g)	浦河港
4 位	岡 英成	7 7 2 点 (アカハラ337mm+アブラコ242mm+1900g)	様似港
5 位	荻野一利	7 0 7 点 (アカハラ356mm+アブラコ231mm+1200g)	井寒台
身長優勝	吉井 博	アカハラ 40.7cm	様似

審査の結果、私は凶らずも準優勝となった。ソイは33cmと計測され年間魚種別大物賞候補となった。優勝した嵐氏は、前野氏と共に浦河港でアカハラをとり年間魚種別大物賞を確定づけるガヤを嫁とした。前野氏はガヤが寸足らずで3位に甘んじた。年間優勝の方は、前野氏がブッチギリの様相を呈していたが、今回の順位でそのゆくえが混沌としてきた。最後まで鏝迫り合いのデットヒートを続けて欲しいものだ。

身長優勝は吉井氏である。早くから40.7cmのアカハラ以下大物を4本そろえたのだが、残念ながら嫁が来なかったのだ。岡氏が4位、荻野氏が5位入賞を果たした。この夏枯れとも思える海況に小さいながらも嫁をゲットした者が入賞を果たしたのだ。



本日の釣果